

主体的に学びに向かう力を育むための指導の手立て
～小学校音楽科における歌唱指導の実践を通して～

宮崎市立恒久小学校
教諭 酒匂 美貴子

目 次

I	研究主題	1 - 1
II	主題設定の理由	1 - 1
III	研究目標	1 - 1
IV	研究仮説	1 - 1
V	研究内容	1 - 2
VI	研究計画	1 - 2
VII	研究構想	1 - 3
VIII	研究の実際	1 - 4
	1 理論研究	1 - 4
	(1) 主体的に学びに向かう力	1 - 4
	(2) 児童による課題解決を意識した学習過程	1 - 4
	(3) 学ぶ意欲を持続させるための自己評価	1 - 6
	2 検証授業	1 - 9
	(1) 検証授業 I・II の実際	1 - 9
	(2) 指導の実際	1 - 10
	(3) 考察	1 - 14
	(4) 意識調査の分析	1 - 17
IX	研究の成果と今後の課題	1 - 19
	1 研究の成果	1 - 19
	2 今後の課題	1 - 19
	参考・引用文献等	1 - 19

I 研究主題

主体的に学びに向かう力を育むための指導の手立て
～小学校音楽科における歌唱指導の実践を通して～

II 主題設定の理由

情報化やグローバル化といった社会的変化が加速度的に進展し、将来の予測が困難な時代において、「生きる力」を育むという理念はますます重要になっている。その中で一人一人に求められるのは、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、主体的に学び続けて自ら能力をのびし、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことである。それを可能にするためには、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合っ

て関わり合おうとする意欲が重要となる。
「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（平成28年12月／答申）」においては、学校教育を通じて子供たちに育てたい姿として「変化の激しい社会の中でも、感性を豊かに働かせながら、よりよい人生や社会の在り方を考え、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決につなげていくことができること」と示している。このような姿を指導者が育成していくためには、子供たちが主体的に問題を捉え、解決しようとする意欲を向上させるための学習過程や評価を工夫することが重要である

と考える。
県では学力向上のための取組を推進し、様々な学校で校内研究の在り方や授業研究の進め方等の研修が進んでいる。所属校では昨年、「教えて考えさせる授業」を目指し、全職員で教える段階・考えさせる段階を明確にし、学力向上に向けた授業改善に取り組んだ。自らが担当する音楽の歌唱指導では、習得したことを新しい楽曲でどのように活用するかを考えさせ、グループ活動による話し合いや練習をさせ、表現の工夫をさせた。活動の中で児童が課題解決のために、身に付けた知識や技能を活用しようと練習を重ねる姿が見られ、自分たちの思いや意図を歌声として表現するができた。しかし、教師が与えた課題の解決に向けて試行錯誤するグループ活動においては、全員が主体的に取り組んでいたとは言い難かった。自分自身の研究結果も含め、研究全体としては、まとめの時間の振り返りの不十分さや、振り返りの方法の曖昧さという課題があった。児童の姿においても、自分自身の課題を意識していなかったり、受身的な学習活動になっていたり

と主体的に学ぶ姿は多く見られなかった。
ここまでの課題を改善するためには、これから必要とされる、主体的に問題に向かい、解決するために試行錯誤しながら学び続け、新たな価値を創造したり、新たな問題を発見・解決したりする力の育成を進めなくてはならない。そのためには、教師が一方的に課題を提示するだけでなく、児童に自分自身の課題を意識させ、その課題を解決させながら、「何ができるようになって、何が課題であるか」を把握させることが重要であり、学ぶ意欲を継続させることが必要である

と考える。
そこで、主体的に学びに向かう力を育むための指導の手立てを研究する必要があるのではないかと考え、本研究では、理論研究として、新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の中の、特に「主体的に学ぶ力」について整理する。そして、音楽科において、児童による課題解決を意識した学習過程を明確にし、学ぶ意欲を継続させるための自己評価の在り方について究明する。検証授業については、第6学年の歌唱の題材で行い、理論研究において究明した指導の手立ての有効性について検証する。

III 研究目標

小学校音楽科における歌唱指導の実践を通して、児童による課題解決を意識した学習過程や、学ぶ意欲を持続させるための自己評価について工夫・改善し、その手立ての有効性を検証する。

IV 研究仮説

児童による課題解決を意識した学習過程や、学ぶ意欲を持続させるための自己評価について工夫・改善すれば、主体的に学びに向かう児童の育成が図られるであろう。

V 研究内容

1 理論研究

- (1) 主体的に学びに向かう力
- (2) 児童による課題解決を意識した学習過程
- (3) 学ぶ意欲を持続させるための自己評価

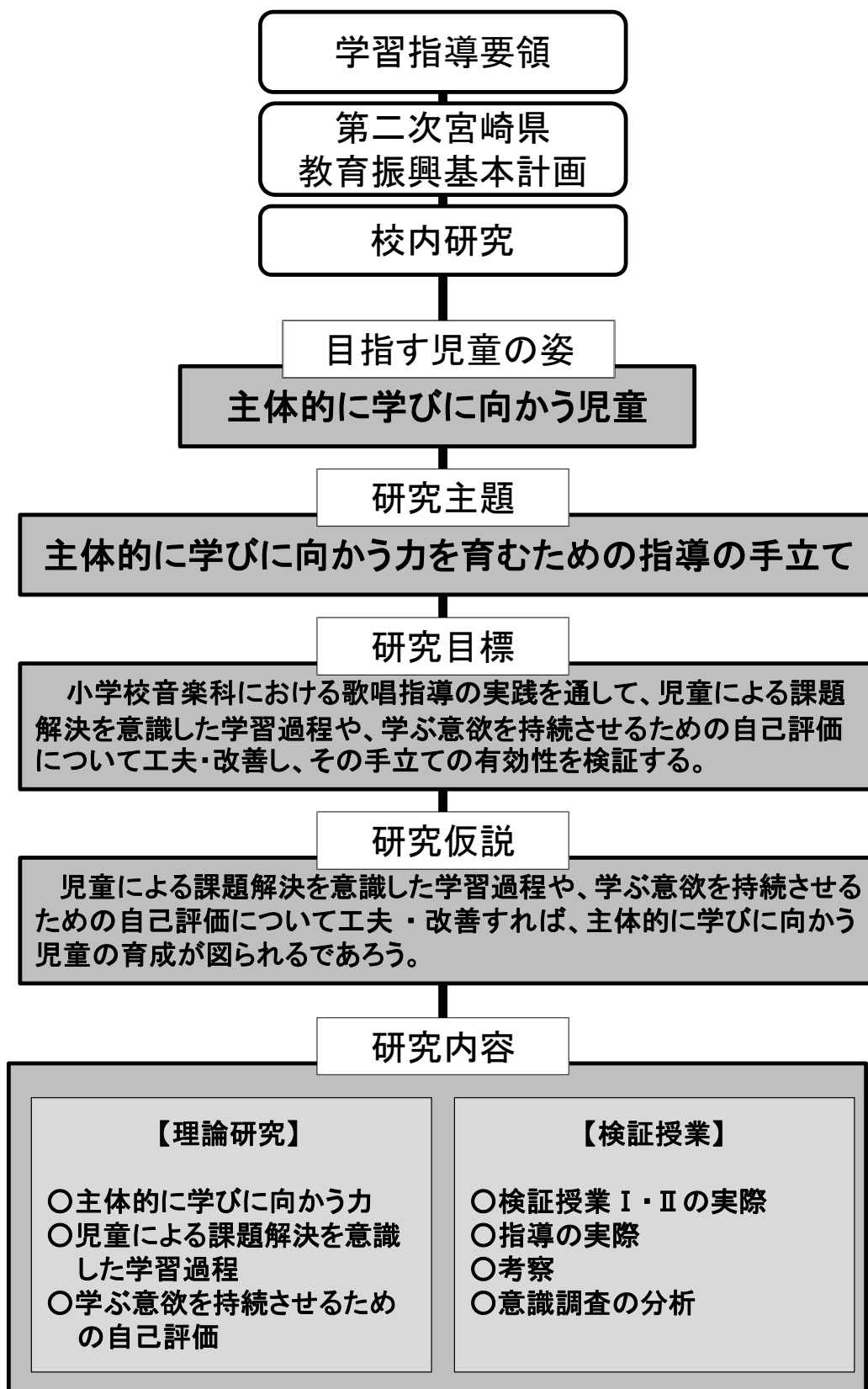
2 検証授業

- (1) 検証授業Ⅰ・Ⅱの実際
- (2) 指導の実際
- (3) 考察
- (4) 意識調査の分析

VI 研究計画

月	研究内容	研究事項	研究方法
4	○研究の方向性	○研究主題・副題・仮説等の設定	○文献研究
5	○研究の方向性 ○理論研究 15日 課長ヒア	○研究内容・研究計画の設定 ○理論の構築	○文献研究
6	○理論研究 ○前期協議会に向けた準備	○理論の構築、研究概要の設定 ○意識調査（児童の意識） ○前期協議会に向けた資料作成	○文献研究 ○アンケート調査
7	7日 前期協議会 ○検証授業Ⅰの構想	○前期協議会のまとめ ○協議会後の修正 ○検証授業Ⅰの学習指導案の内容検討及び準備	○文献研究
8	○検証授業Ⅰの構想	○検証授業Ⅰの学習指導案の内容検討及び準備	○文献研究
9	○検証授業Ⅰの実施 ○検証授業Ⅱの構想	○検証授業Ⅰの実施と分析 ○検証授業Ⅱの学習指導案の内容検討及び準備	○文献研究
10	○検証授業Ⅱの実施	○検証授業Ⅱの実施と分析	○文献研究
11	○全体協議会に向けた準備	○全体協議会の資料・プレゼンテーションの作成	○文献研究
12	13日 全体協議会 ○研究のまとめ	○全体協議会のまとめ	○文献研究
1	○研究のまとめ	○研究報告書の作成	
2	○研究のまとめ ○主題研究発表会に向けた準備	○パネルの作成	
3	9日 主題研究発表会	○主題研究発表会の資料・プレゼンテーションの作成	

VII 研究構想



VIII 研究の実際

1 理論研究

(1) 主体的に学びに向かう力

今回の学習指導要領の改訂では、「知・徳・体にわたる『生きる力』を子供たちに育むため、『何のために学ぶのか』という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱で再整理」し、「何ができるようになるか」を明確化している。

その3つの柱のうちの1つである「学びに向かう力、人間性等」については、「論点整理」の中で「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力をどのような方向で働かせていくかを決定付ける重要な要素であり、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、（中略）自らの思考のプロセス等を客観的に捉える力など、いわゆる『メタ認知』に関するもの」と記されている。

この内容を基に、本研究における「主体的に学びに向かう力」は、「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力」であり、「客観的に自分自身の学びを捉える力」を要するものとする。

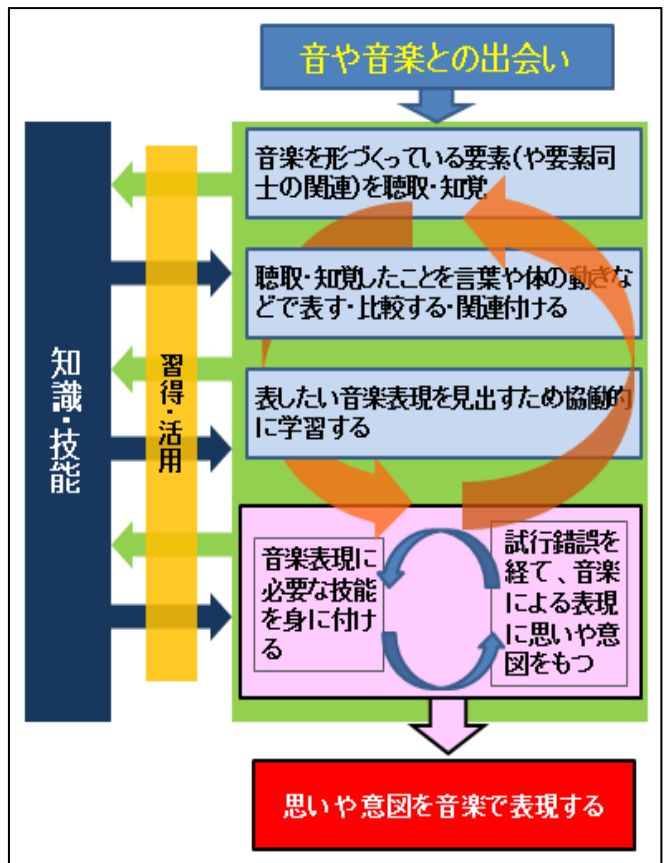
(2) 児童による課題解決を意識した学習過程

ア 音楽科の表現領域で求められる学習過程

表現領域の学習では、思考・判断の過程との関連を図りながら、自分で音楽表現をしたり、友達と一緒に音楽表現をしたりしながら、自分の思いや意図を音楽で表現するための技能を習得・活用できるようにすることが重要である。また、その実践を積み重ねることによって音楽的な「見方・考え方」を成長させ、表現や鑑賞の学習を深めていくことも重要となる。このことを、「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」の中で学習過程のイメージとして図で示している。それを参考に表現領域の学習過程のイメージを【図1】にまとめた。

表現領域については、学習を進めながら、知識・技能の習得と活用を行き来させる。また、様々な音楽的スキルの中から、創意工夫を生かした音楽表現に必要な技能を身に付けることと、試行錯誤しながらどのように音楽で表現するかについて思いや意図をもつことを繰り返すことを通して、思いや意図を音楽で表現することが可能になる。この試行錯誤しながら必要な技能を身に付ける活動の繰り返しによる質の高まりによって学びが深まる状態が、音楽科における探究であると考えられる。そして、この学習過程全体を通して児童による課題解決を図るためには、主体的に学びに向かう力を育成していくことが求められる。

【図1 表現領域の学習過程イメージ】



イ 歌唱指導における学習過程

児童による課題解決を意識した学習過程を踏まえた上で、音楽科の表現領域に求められている学習過程を捉えると、歌唱指導においては、次に示す学習過程が効果的であると考えられる。

【表1 歌唱指導における主な学習と活動状況、習得・活用・探究イメージ図】

段階	1	2	3	4
主な学習内容	新しい曲がどのような曲かを考える。 (場面・様子・楽譜の読み取りなど)	楽譜どおりに歌えるように練習する。 (音の高さや長さ等に気を付けて歌う)	友達と思いや意見の交流をしながら表現の工夫を考え、繰り返し歌って練習する。(グループ活動も含む)	自分たちの歌声を聴き、さらにどうすればいいか試行錯誤しながら仕上げる。 (グループ活動も含む)
活動状況	○ 既習事項の確認と活用	○ 新しい知識・技能の習得と活用	○ 習得内容の活用 ○ 新しい知識・技能の習得と活用 ○ 客観的評価 (聴き合い・録音等)	○ 習得内容の活用 ○ 新しい知識・技能の習得と活用 ○ 客観的評価 (聴き合い・録音等)
習得・活用・探究イメージ図				

ウ 学習活動を支える【共通事項】について

【表1】にまとめた学習過程を通して課題解決に向かいながら主体的に学びに向かわせるためには、一人一人が根拠をもった考えを基に対話することが重要となる。ペアやグループで表現の工夫について考える活動を設定する際、根拠となる知識を基に思いや意図を述べさせなければならない。

音楽科においては、表現及び鑑賞の内容が、歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞の活動の4つに分かれている。それらの全ての活動において共通に指導する内容を、各活動の指導事項の内容と区別して【共通事項】として示している。「小学校学習指導要領音楽」に示しているものを【表2】にまとめた。

【表2 小学校学習指導要領 音楽【共通事項】】

ア 音楽を形づくっている要素	イ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語
(ア) 音楽を特徴付けている要素	(イ) 音楽の仕組み
<ul style="list-style-type: none"> 音色 リズム 速度 旋律 強弱 音の重なりや和声の響き 音階や調 拍の流れやフレーズ 	<ul style="list-style-type: none"> 反復 問いと答え 変化 音楽の縦と横の関係

グループ活動での意見交流や学び合いにおいて、音楽における〔共通事項〕を根拠とした対話ができることが、児童による課題解決を可能にするために必要であると考えられる。

普段の授業において、〔共通事項〕アについては、「音楽をいろいろと味付けできる調味料のようなもの」として子供たちに捉えさせるために、「音楽の調味料」というネーミングにして示している。〔共通事項〕イについては、フラッシュカードを作成している。各学年の系統性を考え、また、学習内容に合わせて、授業の導入で活用し、短時間の学習を繰り返すことによって、定着を図っている。

本研究において、〔共通事項〕アについては、「音楽の調味料」カードをいつでも目視確認できるようにコーナーを設けるとともに、課題を考える時のキーワードとして提示したり、課題解決のための話し合いの視点、友達や自分たちの歌声を聴く際の視点として提示したりする。〔共通事項〕イについては、これまでの学習の積み重ねがあるため、授業の中ではフラッシュカードを用いず、楽譜の読み取りの際に確認していく。

(3) 学ぶ意欲を持続させるための自己評価

ア 自己評価の重要性

先述した答申において、「『子供たちにどういった力が身に付いたか』という学習の成果を的確に捉え、教員が指導の改善を図るとともに、子供たち自身が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするためには、この評価の在り方が極めて重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性を持った形で改善を進めることが求められる。」と示されている。また、子供たちの学習状況の評価については、「教員は、個々の授業のねらいをどこまでどのように達成したかだけではなく、子供たち一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていくことが必要である。」とある。評価の具体的な方法等についての説明の中には、『主体的に学習に取り組む態度』については、(中略)子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。」とある。このことから、児童の学ぶ意欲を持続させるための評価として、自己評価の工夫・改善に取り組むことは重要であると考えられる。

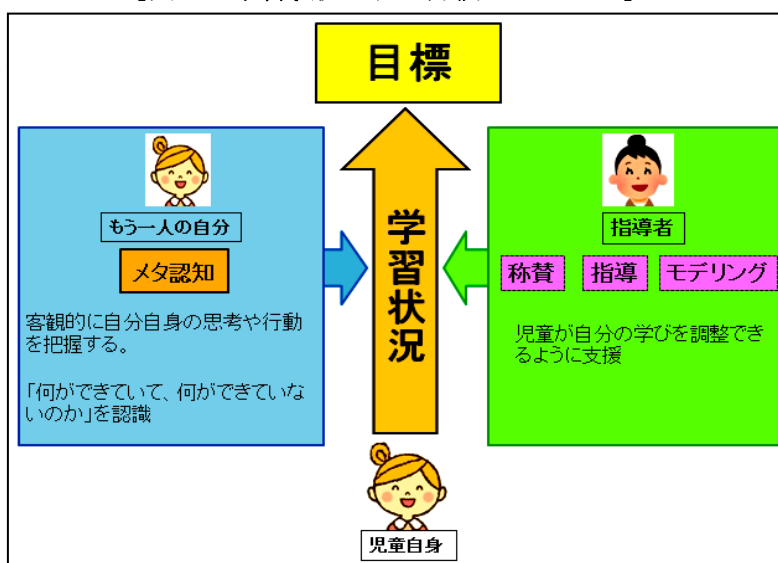
イ 学習状況の自己評価

認知心理学者の和田秀樹氏は、メタ認知を高めるためには「子どもの性格や性質をよく理解し、保護者や教師が、『どうしてそう考えたの?』というような働きかけをし、小さな成功体験を重ねるといった動機付けにより、学習意欲や向上心を高める」ことが重要であると述べている。

学習状況の自己評価のイメージを【図2】に表した。自己評価を行うにあたって児童のメタ認知が不可欠である。

また、同時に、教師は児童が行った評価に対してアドバイスや称賛を行い、児童が自分の学びを調整できるように支援する必要がある。

【図2 学習状況の自己評価のイメージ】



ウ 自己評価カードの作成

児童自らが学習の目標をもち、学習の進め方を見直すなど、学ぶ意欲を持続させるために自己評価カードを作成した。作成の際に留意した視点と作成する際のポイントを【表3】にまとめた。

【表3 自己評価カード作成の視点と作成する際のポイント】

自己評価カード作成の視点		作成する際のポイント
①	目指すゴールが明確になっていること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 題材（単元）目標を確認する。 ○ 教師が何を身に付けさせるのかを明確にして設定する。
②	児童が自分自身のめあてを設定できるものであること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分自身のめあてを選択させるために、複数のめあてを分かりやすい言葉で書く。 ○ 児童に学びの見通しをもたせるために、学習内容と関連付ける。
③	評価する観点が児童に伝わること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各学年の実態や系統性を考え、項目を立てる。 ○ 教師の行う評価との関連を考えて、自己評価の項目を示す。 ○ その題材（単元）の学習に必要な「学習用語」を文言の中に入れる。
④	学習活動の反省ができ、次の課題をもたせられるものであること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童一人一人の実態や思い、課題を具体的に把握する。 ○ 意欲の度合いを可視化するために、自己採点の枠を設ける。 ○ 教師が学習状況を捉えるために、採点の理由の記述欄を設ける。 ○ 新たな課題や次の学習への意欲を記述する欄を設ける。
⑤	教師がアドバイス・称賛を行い、児童の内面に働きかけるものであること	<ul style="list-style-type: none"> ○ 客観的な評価を行い、次への意欲付けを図るために、教師のコメント欄を設ける。

この5つの視点で作成した自己評価カードで振り返らせることが、児童の意欲を引き出し、その意欲が主体性を支えることになると考えた。前述の5つの視点を自己評価カードの作成の際、どのように活用したかを【図3】にまとめた。

【図3 5つの視点を活用した自己評価カード内の項目】

① 目指すゴール	② ゴールを目指すために今日がんばることに〇をしよう。	ふり返り	④ 反省と次がんばること 先生からのアドバイス
曲のふん囲や曲名や曲調を歌で表現するよじだんげん。	表情やしせいに気をつけて歌う。		【録音を聴いた感想】
	せんりつのみとまり【フレーズ】を意識して、フレスの仕方に気をつけて歌う。		
	歌詞の内容や曲のふん囲気からイメージした歌い方の工夫を考える。		【今日は100点満点中 何点？】
	歌詞の内容と曲のふん囲気にふさわしい声を考え、声のひびきを意識して歌う。		点
	曲のふん囲にあった強弱の表現の仕方を考え、工夫して歌う。		【100点にするために次がんばること】
	友達と声を聞き合ったり、教え合ったりして協力して練習する。		【先生からアドバイス】
	表現したい歌い方に近づくように、練習をくり返し、ゴールを達成する。		

エ 客観的に評価させるための手立て

児童が自己評価を行う上で、主観的な評価になることを避けるために次の3つの手立てをとることにする。

- ① ICレコーダー等のICT機器を使用し、録画・録音を行い、自分たちの歌う姿や歌声を鑑賞させ、客観的に評価させる。
- ② グループ活動による学び合いや練習の成果発表といった、相互評価の場面を設定する。
- ③ 教師によるモデリングや声かけ、称賛によって、客観的な視点を意識させる。

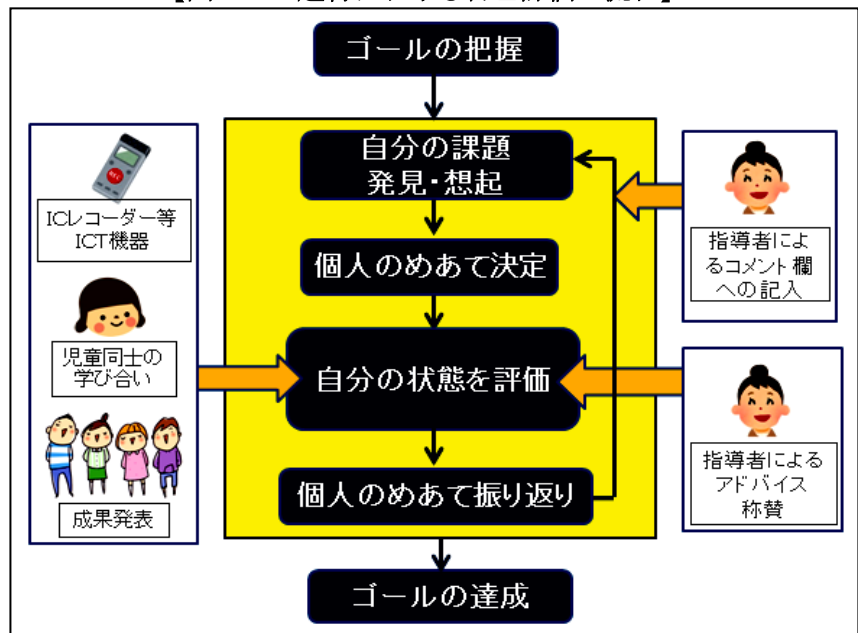
オ 主体的な学びにつなげる自己評価カードの活用

自己評価カードは、授業前の児童の状況把握と児童自身のめあての設定授業後段では児童一人一人の振り返りに活用することを考えて作成した。

自分の学習状況を評価するには、活動状況や必要に応じて客観的に評価させるための手立てを設定する。

児童が記録した自己評価カードは授業後に集め、教師がアドバイスや称賛のコメントを書き込み、次の学習の意欲付けや課題の発見、めあての設定につなげることで、主体的な取組につなげるようにする。

【図4 1題材における自己評価の流れ】



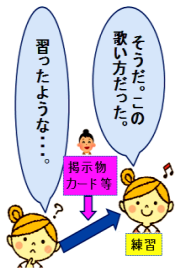


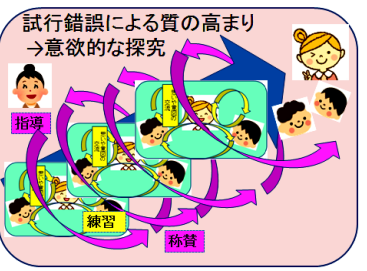
2 検証授業

(1) 検証授業Ⅰ・Ⅱの実際

検証授業の題材の流れを、本資料P5の【表1】に合わせて【表4】にまとめた。検証授業Ⅰは、第6学年「われは海の子」全2時間、検証授業Ⅱは、同じクラスで「ふるさと」全4時間である。

検証授業Ⅰ「われは海の子」は斉唱、検証授業Ⅱ「ふるさと」は合唱となるため、表現の工夫の場と探究の場でのグルーピングの仕方を変えた。

【表4 習得・活用・探究の学習過程に合わせた検証授業Ⅰ・Ⅱの題材の流れ】

段階	1	2	3	4
主な学習内容	新しい曲がどのような曲かを考える。 (場面・様子・楽譜の読み取りなど)	楽譜どおりに歌えるように練習する。 (音の高さや長さ等に気を付けて歌う)	友達と思いや意見の交流をしながら表現の工夫を考え、繰り返し歌って練習する。(グループ活動も含む)	自分たちの歌声を聴き、さらにどうすればいいか試行錯誤しながら仕上げる。(グループ活動も含む)
検証授業Ⅰ	第1次 【主な学習活動】 歌詞の内容を理解し、情景を想像しながら歌う。 【めあて】 歌詞の意味を知って、情景を思い浮かべながら歌おう。	第2次 【主な学習活動】 自分たちの課題や改善点を明確にし、友達と意見交流をしたり聴き合ったりしながら練習を繰り返し、思いや意図を歌で表現する。 【めあて】 情景に合う強弱をつけて歌を仕上げよう。		
検証授業Ⅱ	第1次 【主な学習活動】 楽曲全体の感じをつかみ、主旋律を歌う。 【めあて】 歌詞から情景を思い浮かべて歌で表現しよう。	第2次 【主な学習活動】 歌詞の情景や思いを表現するために、工夫したい点や改善したい点を話し合いながら練習する。 【めあて】 各パートに分かれて、表現の工夫をして練習しよう。	第3次 【主な学習活動】 自分たちの思いや意図を表現できるように試行錯誤し、主体的に練習に取り組む。 【めあて】 2番の表現の工夫を考えて歌を完成させよう。	第4次 【主な学習活動】 自分たちの思いや意図をもった表現の工夫を生かして合唱を仕上げる。 【めあて】 「ふるさと」の合唱を完成させよう。
活動状況	○ 既習事項の確認と活用	○ 新しい知識・技能の習得と活用	○ 習得内容の活用 ○ 新しい知識・技能の習得と活用 ○ 客観的評価(聴き合い・録音等)	○ 習得内容の活用 ○ 新しい知識・技能の習得と活用 ○ 客観的評価(聴き合い・録音等)
習得・活用・探究イメージ図				

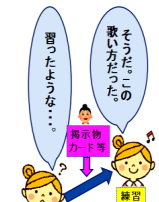
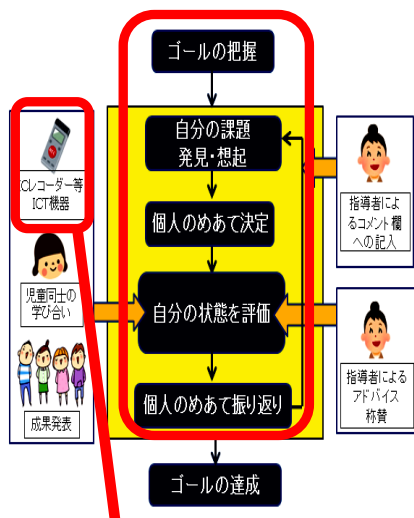
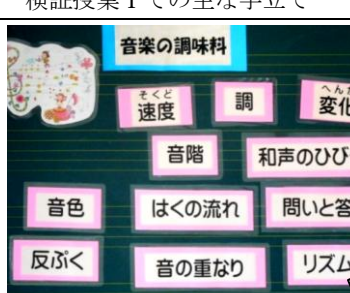
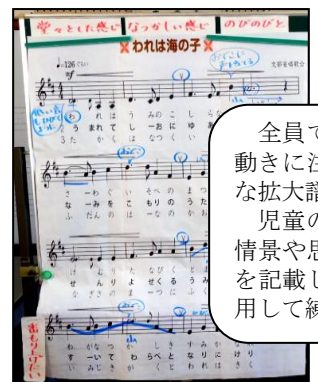
(2) 指導の実際

ア 既習事項の確認と活用の場における活動

a 指導の手立てと自己評価の流れと手立て

この段階での学習活動は「新しい曲がどんな曲か考える」ことであり、新しい曲と出会い、その曲の特徴等を捉えながら、その曲に込められている情景や思いを考えていく段階である。児童による課題解決を促す手立てや自己評価の流れと手立てを、【表5】にまとめた。

【表5 既習事項の確認と活用の場における活動】

【学習活動】		
1 新しい曲がどのような曲かを考える。		
検証授業Ⅰ「われは海の子」 検証授業Ⅱ「ふるさと」		
検証授業Ⅰでの主な手立て	検証授業Ⅱでの主な手立て	自己評価の流れと手立て
 <p>習ったような… 歌ってたこの 歌方だった 指示物 カード等 練習</p>	<p>話合いの中での視点や根拠として活用できるよう「音楽の調味料」カードを常に提示した。板書には、学習内容に応じカードを選択して提示した。</p>	 <p>ゴールの把握 ↓ 自分の課題発見・想起 ↓ 個人のめあて決定 ↓ 自分の状態を評価 ↓ 個人のめあて振り返り ↓ ゴールの達成</p> <p>指導者によるコメント欄への記入 指導者によるアドバイス称赞</p>
 <p>音楽の調味料 そくど 速度 調 へんが 変化 音階 和声のひびき 音色 はくの流れ 問いと答え 反ぶく 音の重なり リズム</p>	 <p>全員で歌詞や旋律の動きに注目できるような拡大譜を準備した。児童のイメージした情景や思い、その根拠を記載した拡大譜を活用して練習した。</p>	<p>自分の課題発見・想起と個人のめあての決定をつなげるために、本時の課題を明確に示した板書を計画した。</p> <p>教師のスマートフォンでの録画とその鑑賞を行い、自分の課題の想起や個人のめあての決定に生かした。</p>

b 児童の様子

自己評価カードから学びのゴールを把握させ、どのような項目をめあてとして選び学習していけばゴールを達成できるのかを確認させたことで、題材の導入段階で見通しをもたせることができた。また、拡大譜を提示し、歌詞の意味を全員で確認したり、歌詞や旋律から気付いたことやイメージを書きこんだりすることで歌唱の学習の流れを想起させることができ、歌詞から情景をイメージしようと主体的に考える姿が多く見られた。

